

やまほんのひとりごと!



赤木明登さんの初めての展覧会は04年「昇ル、搦ル」というタイトルの漆で塗られた大きなハシゴとスコップ、約20点の展示でした。漆器(飯椀や汁椀)をイメージして来られた方はびっくり。この展覧会は赤木さんにとっても僕にとっても真剣な遊びで、工芸という世界感を広げるきっかけになった展覧会だった。今も感じています。日常に使う器を展示するために作ったギャラリーだと思われがちですが、僕自身は同時に大きな立体作品を展示したいというイメージがありました。赤木さんがハシゴを並べた空間は僕が思い描いていた空間でもあり、今も脳裏に焼き付いています。

YAMAMOTO tadaomi
 ギャラリスト、建築家。1974年三重県伊賀上野生まれ。2000年ギャラリーやまほんを開廊。くらしの道具を中心に洋服や彫刻作品なども取り扱うギャラリー。11/6(土)~11/28(日)まで「赤木明登 漆 展」、12/4(土)~12/26(日)まで「冬のやまほん展」を開催。

赤木明登さんの作品があるお店

- [三重・伊賀上野] ギャラリーやまほん ☎0595-44-1911
- [大阪・阿倍野] 倉林 ☎06-6624-2531
- [大阪・内本町] SHELF ☎06-6355-4783
- [神戸・栄町] 草灯舎 ☎078-331-9187
- [滋賀・長浜] 季の雲 ☎0749-68-6070
- [奈良・中山町] 秋篠の森 月草 ☎0742-52-8560



自宅の隣に工房が併設。リビングには食器棚が二つあり片方に漆器と酒器が並び。左は明治初期、中は江戸時代の合鹿椀。右が角 偉三郎作。

能登半島の中腹に位置する漆の町、輪島。東京で雑誌編集者として働いていた赤木明登さんは27歳の時、職人の道へ進むべく、奥さんと長女を連れて輪島に移り住みました。

きっかけは、百貨店で開催されていた角 偉三郎さんの作品展。漆器と言えばハレの日のイメージですが、その展覧会で見た器は、漆の価値観を変えてしまうほど衝撃的でした。もともと室町時代から石川県の合鹿集落で作られていた合鹿椀(ごうろくわん)と呼ばれる器を写した偉三郎さんの作品には、荒々しく生き生きとした存在感がありました。その夜、偉三郎さんと居酒屋で意気投合、輪島行きを決意。1年後には東京から移住し、職人としての新たな人生がスタートしました。

木地師、蒔絵師など、輪島塗りは職人が分業で作っています。赤木さんは木地に漆を塗る塗師(ぬし)と呼ばれる職人。木地の外側に和紙を張り、かすかにテクスチャーを残したものや、紙のように薄く削った木地のものまで、赤木さんの器はいわゆるきらびやかな輪島塗りとはいずれも違う、使うことが前提で作られています。驚くほど軽く使い込むほどに漆の色は深みを増し、和紙張りなら傷や手垢も付きにくい。道具と公言してはばからない、実用的美を備えた毎日使いたくなる器です。

渓谷に向かい合うように建てられた自宅のベランダから、落ち葉の上に青く錆びた木の板が並んでいるのが見えます。これは、赤木さんには珍しい平面作品。木の表面に金属粉と漆を混ぜたものが塗っており、雨風にさらされ、その上を野生動物が歩き、鳥が糞をする。自然が残す痕跡が作品になっていくそうです。輪島での暮らしの中で、時には自然の中に身を投げ、素潜りで魚を捕まえ、山でキノコを採る。それを食し自分の体に取り込んでいくと、まるで縄文時代の世界にいるかのような気持ちになると赤木さんは笑います。漆などの自然素材は、取れた場所や年でばらつきがあり、一定のクオリティに仕上げることは難しい。だからこそ、赤木さんはいつも自然の中に身を委ね、耳を傾け、研ぎ澄ませた感覚を、ものづくりに昇華しているように思えます。

輪島へ来て22年、「もっと普通のもので作りたい」と赤木さん。それはテクスチャーに頼らず、形と純粋な漆の色だけで作り上げた器。「なにか物足りなくて、でも飽きない。僕が作ったものじゃなくてもいいから、素直にそんな器が見たいんです」。今日も赤木さんは漆を塗り続けます。

赤木さんは、料理も得意で作るのはもっぱら酒の肴。リビングの真ん中に薪ストーブ。買うことも仕事のうちと、棚には時代もさまざまな器のコレクション。

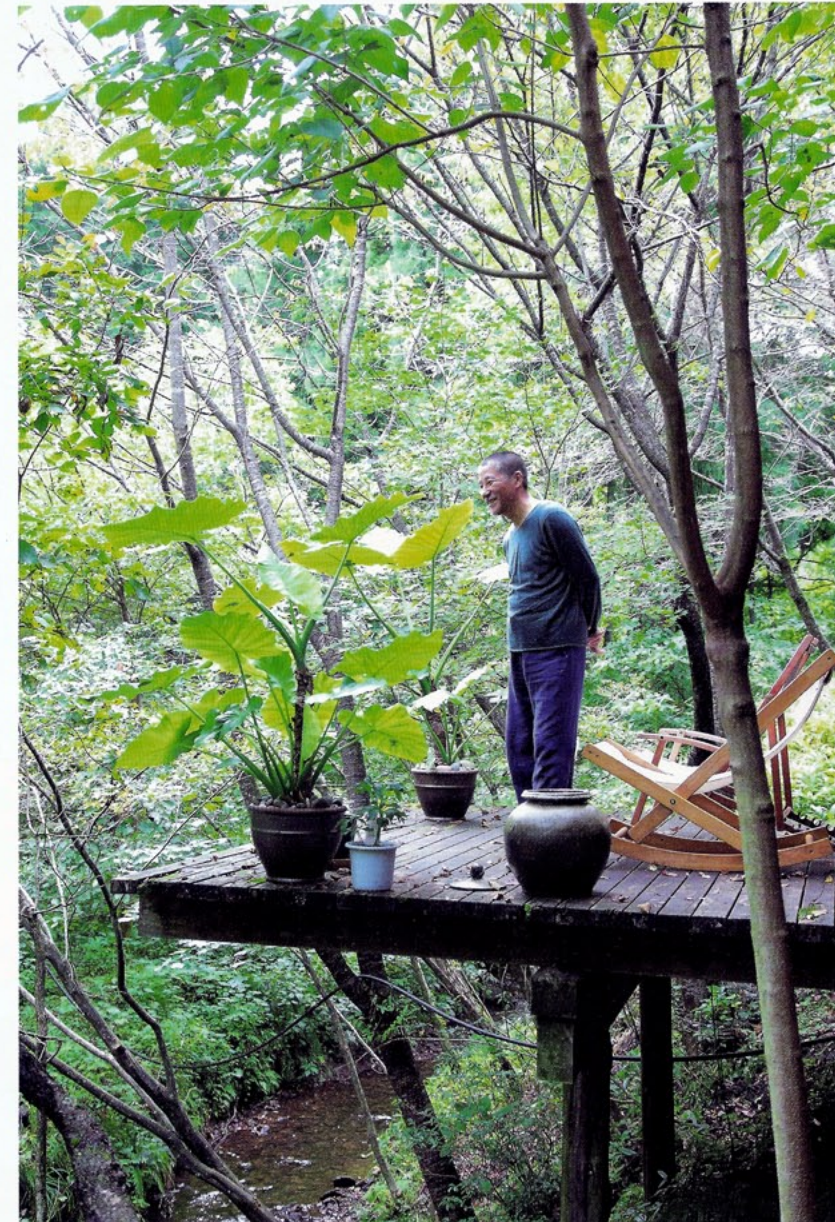


vol.10
ものづくりとくらし

ギャラリーやまほん 山本忠臣さんと巡る

山本忠臣さんともものづくりに携わる人の暮らしを訪ねます。
 ベランダの下には小川が流れ、裏庭からそのまま山の中にも入っているほど、緑に囲まれた赤木さんの家。
 冬には2メートル近くも雪が積もるそうです。

撮影/石川奈都子



塗師
赤木明登
 原

AKAGI akito
 1962年岡山生まれ。婦人雑誌の編集を経て、88年輪島へ移住。輪島塗の下地職人・岡本 進のもと修業、94年に独立。97年にドイツ国立美術館「日本の現代塗師物十二人」に選出。

絵柄の飯椀は赤木さんが普段使っている村瀬治兵衛作。その上に重なる朱の器は奥さまの智子さんが使う、和紙張りのもの。

